吉野川ラムネット通信

Vol. 12

2017年12月1日 発行

グローバルに考え，ローカルに行動を

古来、日本人は、自然と共にあり、暦の上で、四季の移り変わりを二十四節気で、言い表しました。しかし近年、日本の気候も変わり、春と秋が、短くなっている感がします。昔から「暑さ、寒さは、彼岸まで」と言われてきましたが、お彼岸を過ぎても暑さが続き、大型台風が、日本列島を脅かします。日本だけの問題ではなく、世界各地で、異常気象による被害や海面上昇による海岸浸食などが、起きており、ツバルなどの島々が、沈没の危機に瀕しています。

地球の平均温度は、20 世紀の 100 年間で、約 0.74℃上昇したといわれています。12.5 万年前の氷河期と現在の平均気温の差がたった「5℃」すると 100 年で 0.74℃の差は、大変深刻な事態だと理解できます。海では、日本近海における 2016 年までの 100 年間で海面水温の上昇率が、＋1.09℃とのことで、世界平均の上昇率＋0.53℃よりも高いのです。地球温暖化が、かなりのスピードで、進んでいます。この状況を踏まえて、2015 年9月、「地球を破壊から守ることを決意する」と国連全加盟国193ヵ国は、全会一致で「持続可能な開発目標（SDGs）アジェンダ 2030」を採択し、同年 12 月、今世紀末までの平均気温上昇を産業革命前と比較して 2℃未満に抑えることを目指す「パリ協定」も締結されました。

約締結時には、地球の危機を世界で共有したはずでしたが、2 年後の現実は、皆さんもご存知のように、アメリカが脱退を表明し、目標達成が、大変厳しい状況となっています。

この SDGs「持続可能な開発目標」という言葉自体が、まだまだ私たち市民の中で、消化できていませんが、自然環境をフィールドとして活動する私たちは、足元の生態系を特に吉野川、河口干潟を最大限守っていきたいものです。

「我々は、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」

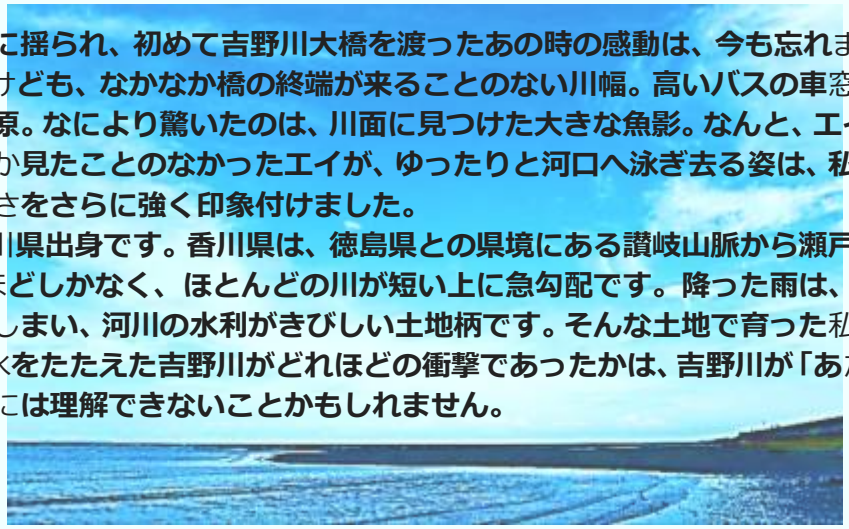
（アジェンダ 2030）

藤永知子

吉野川とのゆるやかな関係

高徳バスに揺られ、初めて吉野川大橋を渡ったあの時の感動は、今も忘れません。行けども、行けども、なかなか橋の終端が来ることのない川幅。高いバスの車窓から見える干潟や葦原。なにより驚いたのは、川面に見つけた大きな魚影。なんと、エイでした。水族館でしか見たことのなかったエイが、ゆったりと河口へ泳ぎ去る姿は、私の中の吉野川の雄大さをさらに強く印象付けました。

私は、香川県出身です。香川県は、徳島県との県境にある讃岐山脈から瀬戸内海までが 30km ほどしかなく、ほとんどの川が短い上に急勾配です。降った雨は、すぐに海へ流れ出てしまい、河川の水利がきびしい土地柄です。そんな土地で育った私の目に映る、満々と水をたたえた吉野川がどれほどの衝撃であったかは、吉野川が「あたりまえ」で育った方には理解できないことかもしれません。



徳島県で暮らすようになってから、時折、干潟の観察会や市民調査に参加するようになりました。たくさんの有識者の方々に、さまざまな吉野川の魅力を教えていただき、興味関心が膨らみます。

個人的にも、気が向く都度に吉野川へ足を運びます。ある時は、「青い宝石」と形容できる美しいシオマネキの稚ガニを写真に収めようと干潟を訪れて、偶然、護岸の隙間に大きなノコギリガザミ（ドテホリ）を見つけて嬉々とし、また別の日には、干潟に交錯した野鳥の足跡があることに気付いて、野鳥の方も気になったり。地図に「旧吉野川」の表記を見つけた時には、「旧ってどういうこと？」と図書館に走ったり…。吉野川には、いつも必ずなにかしらの新しい発見があります。

こんな風に書くと、どっぷりと吉野川につかっているように思われるかもしれませんが、実はそうでもないのです。何か特別に知識や技術を持ち合わせているわけでもなく、熱心に保全活動をしているわけでもなく、私は、至極ゆるく、ゆるく、吉野川との関係を結んでいます。自分の気が向いた時にだけ、干潟を訪れて写真を撮ったり、観察会に参加したり、調べ物をしたりしているだけなのです。

活発に活動されている方から見れば、少しもどかしく見えるかもしれません。でも、こんなゆるさも、吉野川との関わりを息長く続けていけるひとつのコツだと思うのです。一番いけないことは、無関心だと私は思います。吉野川にまだまだ隠れている多くの魅力を、ぜひ吉野川が「あたりまえ」である人たちにも見つけていただきたいです。

吉野川は、いつでも、だれにでも平等に接してくれます。マイペースだけれども、意識の隅にはいつも吉野川への関心を置いて、これからもゆるやかな関係を続けていきたいと思います。

高木　千絵

～吉野川礼讃10～

江川湧水

吉野川の宝物の一つに　江川湧水がある。そして江川は、吉野川の旧流路の一つでもある。

湧水というのは美しい。地面の土砂をおしのけて湧くのであるから、ゆらぎがある。その湧出は、たとえ小さなピンホールでも見飽きない。

かつて、昭和30年代頃、麻植郡鴨島町に、江川遊園地と呼ばれる日本庭園があり、池、築山、多くの橋，四阿〈あずまや〉などが、美しかった。そして清澄な池水に色とりどりの大小の鯉たちが、群れていた。その後ジェットコースター観覧車等の大型遊具を備えたレジャー施設となり、近年には大型の病院となった。水のゆくえは・・・・・

夏に水温 10℃前後、冬には、20℃前後という水。この不思議は、地下水の流れが急傾斜でない限りは、非常にゆっくりと砂礫層中の定温層を流れるためとされる。この時間差で、地下水・伏流水は、半年のズレをじる。湧水として地表に出たとき夏に冬の冷水、冬に夏の温水となるのである。真夏に天然の冷水に手を付けた心地よさ。寒風に川からの温度差の湯気があがる江川なのである。

天然記念物の美しい湧水は、いつまであるのだろう。かつて、大量の砂利採集などで水温の変化が、あったという。「造化の妙」。天然現象が、続けと祈る。

蛇足ではあるが、先日県南の伊座利へ行き、久しぶりに海水に手を付けて驚いた。海水が、暖かく感じられたのである。（その日は、急に冷え込み、東京では11月下旬並みと報じられていた10月13日であったが）案の定、台風の発生はまだまだ続き、台風は日本近海にお出ましになる。

水温こもごも

川野真理

こち

夏が旬と言われるコチを紹介しよう。

頭部は平たく目が上に、口も上向き、獲物に海底から襲いかかるのに適した姿は一目見たら忘れられない。　海底の斜面に座って上を見て、イワシ、キス、ハゼ、アジ等小魚やエビ、カニ等の甲殻類、口に入るサイズのものを食べる肉食魚である。

釣り方はこれらの生きた餌による一本釣りが従来型、動くものを襲う性質を利用して金属のルアー、ゴムのようなソフトルアーを使うのが最近の主流だ。　白鷺大橋下流の砂州からルアーで釣れるのでぜひ挑戦を。

水上げされても料理屋へ売られてスーパー、魚屋に並ぶことはまれである。
旬は夏だが、一年中とても美味しい。

中央から尾にかけての身は三枚におろすと骨もなく『うすづくり』にするとフグに負けないくらい旨い。　『夏フグ』とも呼ばれることも有るらしい。プロの料理人は三枚下ろしの代わりに、大名下ろしという方法で刺身に使用する部分を一気に削ぎ落とすそうだ。皮を引くコツは尾の方から包丁を入れ、胴が丸いので皮を横に振るように動かすとうまく引ける。この時包丁はあまり動かさないのがコツ。
腹部周辺の身は煮付け、鍋物、揚げ物にチリソース等。
頭部は煮付けや焼き物にすると口の両側の頬肉がとても美味しく、引き締まり歯応えがたまらない！

グロテスクな頭を更にバラしていくと、あちこちに小さな身が見つかりこれらは『コチの頭嫁に食わせ、姑女知らずの身がござる』等と面白可笑しく言われる所以である。大切な奥さん、秘密の身をどうぞお楽しみください！　ごちそうさまでした!!

さちのちち

イベント報告　7月28.29.30日

写真展　**ごちそうさま吉野川**　**見よう！　知ろう！　感じよう！**
吉野川を四国初のラムサール条約湿地に

主催：吉野川ラムサール条約登録湿地をめざす協議会
（日本野鳥の会徳島県支部、吉野川ラムサールネットワーク、吉野川ひがたの会、NPO法人里山の風景を守る会、NPO法人川塾）

夏休みということもあり、出足も順調に来場者が訪れてくれました。
5団体の写真・アンケート・吉野川にかかわる食べ物や工芸品の展示・カニなどを折る折り紙、ヨシバッタを作り・干潟の生きもの描こうのコーナーを設置、展示しました。
オカリナ演奏、ミニ講演「吉野川の鳥たち」も行いました。
総勢800人の来場者となりました。
ありがとうございました。

お知らせ

■シンポジウム　「私は川の守人」　（川遊びと食と川文化の継承）　日時　2018年2月12日　13:00～
場所　文化の森総合公園　21世紀イベントホール　参加費　一般700円　小中学生500円

会員募集中　会費：1口1,000円
お問い合わせ&お申し込みは事務局まで
■振込先：ゆうちょ銀行
吉野川ラムサールネットワーク
口座番号　01640―6－52973

Facebook
も観てね！

吉野川ラムサールネットワーク
事務局　藤永知子
Tel：090－7268－9448
Email：taikazann@hotmail.com
HP:http:// www.yoshinogawa-ram.net